

I 序 章

調査の経過と概要

この報告は、平城京左京三条二坊三坪にあたる奈良市三条大路一丁目594ほか(旧奈良市尼ヶ辻コドサ)のレストラン新築予定地において、奈良国立文化財研究所が行った発掘調査にかかわるものである。調査は奈良県教育委員会の指導のもとに各方面の協議の末、原因者負担で実施されるはこびとなり、開発行為者の株式会社東鮮の協力を得て、県教育委員会の委託を受けた奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が実施した。

調査地は国道24号線バイパス(高架)の東に接し、国道368号線(大宮通)にも近く、近年とくに市街地化の傾向の激しい近鉄新大宮駅周辺の地域に位置する。試みに1962年と1984年の調査地周辺の空中写真(PL. 1・2)を比較すれば、急速な開発の足跡は歴然としている。

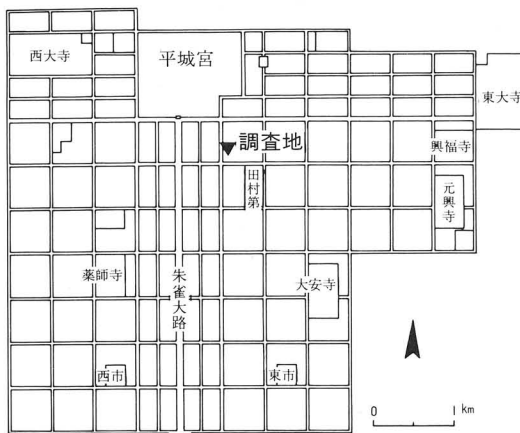


fig. 1 平城京と調査地位置図

しかし、当地は奈良時代の園池として著名な特別史跡平城京左京三条二坊宮跡庭園 (fig. 5) が東隣りに存在することによって知られるように、奈良時代においても平城宮に近い京内の一等地であり (fig. 1)、貴重な遺構の存在が推測された。

調査地は東西に細長い三枚の水田として残されており、うち一番北の一枚のみ駐車場用に盛土されていた。この敷地(2,813㎡)のうち東南方の建物予定部分(857㎡)にできるだけ重ね、さらに左京三条二坊三坪の

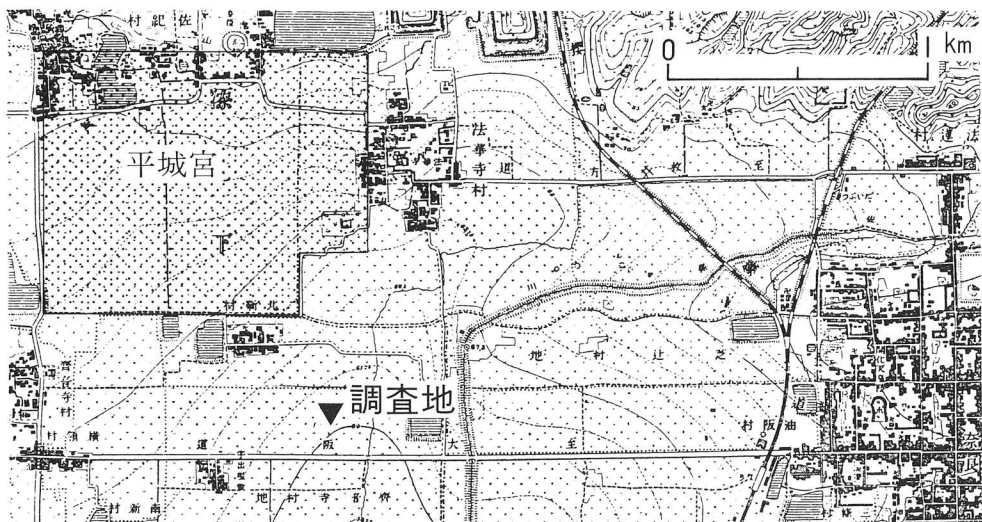


fig. 2 調査地周辺地形図(明治18年測量、同31年発行、仮製二万分一地形図)

東西中軸線付近を北に延長したL字形に発掘調査区を設定した。調査地が三坪の内側にあって条坊関係の遺構がかからないため、坪中心部の様相を明らかにしようと意図したのである。調査面積は補足調査による拡張部をあわせて940㎡となった。

発掘調査にあたっては、奈良国立文化財研究所が行っている平城京条坊の地区割りにしたがって調査区を6AFI-P区と定めた。さらに宮跡庭園の調査時の基準にあわせて、国土方眼座標(第6座標系)の基準点(X=-146,369.607、Y=-17,977.621)をP I 70として3m方眼の小地区を設定し、発掘遺構と遺物の記録用の地区名とした。

調査は1984年2月27日から3月27日までの1ヵ月の期間、tab.1の工程で行った。今調査では検出した遺構の状況や調査期間にかんがみて、細部をのぞく実測調査を写真測量によって調査の迅速化を図ることとした。予め正確な標定点を遺跡に設置し、ヘリコプターを利用した空中写真撮影を行い、そして写真測量による図化の成果として精度にムラのない1/50・1/100の大縮尺の実測図を得ることができた。なお関係者の協議の結果、検出遺構の全面的な埋戻しは行わず、遺構面に真砂を厚く敷き養生をはかって調査を終了した。

遺構を検出した面は、現地表下30～50cmの地山面(暗灰褐色粘土・黄褐色粘土)であり、部分的に後世の削平を受けていたものの、遺構の保存状態は極めて良好であった。

検出した主要な遺構は、奈良時代の掘立柱建物8棟、掘立柱塀4条・井戸2基・土壇4基などである。その結果、奈良時代を通じて5期にわたる平城京左京三条二坊三坪の敷地利用状況を明らかにすることができた。中でも奈良時代前半から中頃にかけて三坪は坪全体を占める宅地であったこと、その奈良時代中頃の宅地に坪内を1/2に区画する塀や整然と配置された建物群を検出したこと、そして和同開珎2枚を納めた地鎮用と思われる須恵器壺の検出、などの新知見を得ることができた。



fig. 3 発掘調査風景

1984. 2. 27 現地協議及び調査区設定
バックホーによる表土排除
3. 5 機材搬入
3. 6 遺構検出開始
3. 7 基準点測量、地区杭設定
3. 13 地鎮の壺出土
3. 21 遺構検出終了
空中写真撮影用の標定点設定
3. 22 空中写真撮影、地上写真撮影
3. 23 地上写真撮影、井戸等補足調査
3. 24 井戸等補足調査の実測
3. 27 土層図作成、遺構養生(砂入れ)
機材撤収

tab.1 調査日程